

第2回

環境被害に関する 国際フォーラム



水俣病

失敗の教訓を将来に活かす

KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY
熊本学園大学 水俣学研究センター

入場料
無料

開催趣旨

水俣病患者の発生が公式確認され57年が経過している。産業による広範な環境汚染を通じて重篤な患者が発生したこと、胎盤を通じて次世代にも重大な影響を与えたことなどは人類が初めて経験したものであった。また、この水俣病事件は、政治、経済、法律、社会、文化など各方面に大きな影響をもたらした。さらに、水俣地域や新潟では、被害者たちは今なおその傷が癒えておらず、問題も全て解決したとはいえない現状がある。

熊本学園大学では、2000年に原田正純を中心に水俣学研究プロジェクトを設置し、水俣病事件を様々な分野から多角的に捉え、水俣病の教訓を世界に発信し、未来にその教訓を残すような研究を行ってきた。

私たちは、2006年夏に「水俣の教訓は活かされたか」という問い掛けを国内外に発する国際フォーラムを開催した。この成功をふまえて、長期継続的な国際交流と水俣学の国際発信を願い、第2回国際フォーラムの開催を企画した。これは、水俣学の理念と方法に則り、国境を越え、学問の分野を超え、専門家と市民の分断を超えた取り組みによって、水俣の負の遺産（失敗）を繰り返すことのない世界を構築するためである。

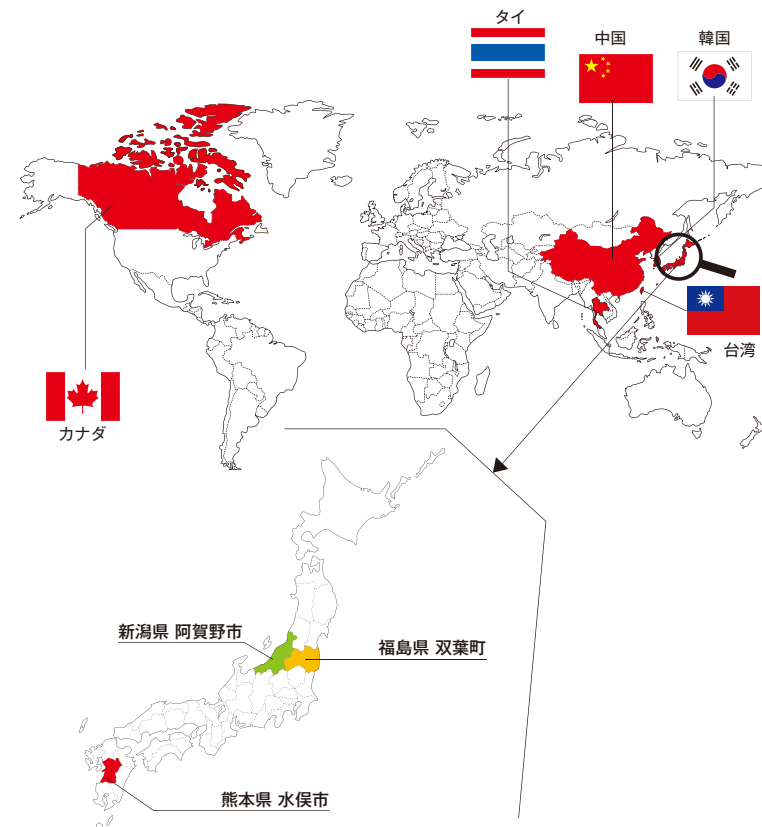
ここでの課題は以下の3点に集約される。

- 1) 日本において起きた水俣病が引き起こした被害につき、その教訓が日本国内のみならず世界において、どのように活かされたか、あるいは活かされなかったかを検証する。
- 2) 世界各地で環境汚染が引き起こされ被害が発生している地域において、日本の経験が教訓として活かされたかどうか、報告を受ける。
- 3) 世界各地で起きていることに関する相互理解を深め、水俣の教訓が活かされるのはいかにすれば可能であるかを検証し、将来に向けて発信する。

このフォーラムは、被害者の視点にたち、かつ科学的で公平で実践的な議論の場となることであろう。

熊本学園大学 水俣学研究センター長 花田 昌宣

参加国・地域



プログラム

1日目 9/5(木) 9:30 開演 9:00 開場

会場：熊本学園大学高橋記念ホール(14号館1階)

内容：基調講演 丸山 定巳(熊本学園大学水俣学研究センター顧問)

特別講演 井戸川 克隆(前福島県双葉町長)

セッション1

被害の全容と地域社会への影響、現地からの実態報告

カナダ、タイ、中国、台湾、韓国、新潟 ほか

2日目 9/6(金) 9:00 開演 8:30 開場

会場：熊本学園大学高橋記念ホール(14号館1階)

内容：特別講演 淡路 剛久(日本環境会理事長)

セッション2

被害発生と拡大防止、被害補償と住民の闘い

カナダ、タイ、中国、台湾、韓国、水俣 ほか

セッション3

現状から将来への展望

カナダ、タイ、台湾、韓国、新潟 ほか

3日目 9/8(日) 9:30 開演 9:00 開場

会場：水俣市もやい館ホール(3階)

内容：提言「水銀条約に関して」中地 重晴(熊本学園大学社会福祉学部教授)

患者・住民からの訴え

世界と連帯し発信する

カナダ、新潟、水俣 ほか

パネルディスカッション

水俣病・失敗の教訓をアジアに活かす

各国・地域より報告

参加国・地域の概要

カナダ

カナダ・オンタリオ州の2つの先住民居留地で水俣病がおきている。発生源は居留地から約200キロメートル上流にあるドライデンのパルプ工場で、1962年から1970年頃まで水銀を流し続けていた。1975年以来、原田正純らによる調査により水俣病の発生が確認されているが、カナダ政府は水銀汚染の事実を認めているものの水俣病の発生は認めていない。1980年代半ばにようやく健康被害補償制度ができたが、不十分なものであった。カナダにおける水俣病被害に関しては、根強い先住民への差別が背景にある。



報告者

ジュディ デシルバ、バム マンダミン、ソア アトキンヘッド、ピーター カウチスキー

中国

中国では近年の経済成長の陰で深刻な公害・環境問題が発生している。国境を越える汚染も知られているが国内では数多くの事件が発生している。長江と黄河の間を流れる淮河は化学工場などから排出された様々な有害物質によって汚染され、多数の病気が発生した。住民の抗議は中央政府を動かすに至り終息した。このような例は現代中国では枚挙にいとまがないといわれている。



報告者

ワン ミン、フォ ダイシャン、ヤン リー

韓国

2012年9月27日、韓国慶尚北道龜尾市の工業団地でフッ化水素酸ガスが漏れ、現場にいた作業員4名を含む5名が死亡、付近の住民ら4200人あまりが治療を受けたほか、農作物や家畜も被害を受ける事故が起きた。事故を起こしたのは、化学薬品メーカー「ヒューブグローバル」で、タンクローリーに積まれたフッ化水素酸を貯蔵庫に移す作業中に、燃料送出口バルブが開きガスが漏れたとされている。韓国政府は翌月10月8日に、工場周辺を「特別災難地域」に決定したが、事故後の初期対応に大きな問題があったと指摘されている。



報告者

イ ユンゴン、イ ドンシク、キム ヤンホ、鈴木 明

タイ

タイ東部、ラヨーン県にあるMap Ta Phut工業団地は、主に石油精製コンビナートを中心に、プラスチック製品製造、鉄鋼業、金属加工業などのタイ最大の臨海工業団地である。JICAが造成し、日系企業も多数進出している。1990年代から、揮発性有機化合物による大気汚染が問題になった。毎年のように爆発事故が起き、周辺住民と工場の共存が問われている。工業団地の拡張計画の中止を命じる行政裁判所の判決があり、タイの国内政治課題の一つとして、注目されている。



報告者

ノイ ジャイタン、スリチャイ ワンゲオ、スパチャイ ラムクンワラポーン、ベンチョム セーターン

台湾

日本統治下の台湾で、日本鐘淵曹達株式会社によって1938年に創設され、戦後、中華民国政府が引き継いだ化学工場跡地で、1994年に高濃度のダイオキシンやベンタクロロフェノールなどによる汚染問題が表面化した。その後、工場内労働者や周辺地域住民の健康問題が元労働者や地元住民から提起された。2008年には損害賠償を請求する裁判が始まり、原因究明や汚染された地域の修復などがなされないまま今日に至っている。



報告者

フウアン ファンチャン、ワン ユーチョン、リン ジージン

日本からの参加

福島

長谷川 健一 (飯館村酪農家)、井戸川 克隆 (前福島県双葉町長)、福田 健治 (弁護士)

新潟

近 四喜男 (新潟水俣病被害者の会幹事)、濱野 秀人 (新潟水俣病安田患者の会事務局)、斎藤 恒 (医師)

水俣

上村 好男 (前水俣病互助会会長)、坂本 しのぶ (胎児性水俣病患者)、佐藤 英樹 (水俣病被害者互助会会長)、谷 洋一 (NPO法人水俣協働センター事務局)